

『余地』

～相談業務を楽しむ方法30～

<肉なしのカレー>

杉江 太郎

～新しい社会的養護～

社会的養護という言葉には、広い意味では、社会全体で子どもを育てるといような意味があるが、狭い意味では何らかの事情があって家庭での生活ができなくなり、施設や里親などの代替養育で過ごすということが含まれており、どちらとも社会的養護と言われる。

施設の歴史をたどると、例えば児童養護施設と呼ばれる施設は、かつては孤児院と呼ばれ、親のいない児童を養育するための施設であったが、今では親のいない児童は少なくなっている。施設と言えば、イメージとして学校のような大きな建物に、多くの子どもが集団生活をしているというイメージを持つ方もいるかもしれない。確かにかつては、大舎制と呼ばれる大きな建物で、同じ屋根の下で多くの子どもが集団で生活しているということもあった。しかし、今では、国の方針にも沿う形で、施設を少しでも家庭に近い形にということで、小規模化が勧められている。国も大きな建物を建てる場合には金を出さないが、地域に分散化した施設、小規模化した施設（一軒家で6人程度

の子どもが生活するイメージ）を新設する場合には、お金を出すというような話を聞いたこともある。

私が、担当する自治体でも、大舎制と呼ばれる施設は減ってきており、ユニット制、地域小規模、分園型と呼ばれるような小さな集団を軸にした施設運営が主流となっている。

～肉なしのカレー～

少し前に、定員が6人である地域小規模と呼ばれる施設で子どもと話をしていたときに、その子どもが『この前のカレーに肉が入っていなかった』と不満を語る場面に出会った。

この不満を聞いて、様々な疑問が思い浮かんだ。そもそも肉がないのにカレーを作ろうと思うだろうか。カレーを作るに当たって、手順はそれぞれだとしても、一般的には、玉ねぎ、ジャガイモ・にんじんを炒めて・・・肉を入れようと思ったら・・・「肉がない！」・・・ということがあるだろうか。もしあったとして、そのまま肉がない状態でカレーを作り終えることがあるだろうか。肉がなければ、近所の

スーパーに買いに行く、冷凍庫に肉がないか探すなど方法は思い当たる・・・。

そんな疑問を頭にしながら、その子ども話を聞いていると、その日の調理を担当している職員も、肉がないことは把握しており、別の職員が出勤してきたタイミングで、肉を買いに行こうとしていたが、その職員が発熱して出勤できなくなってしまったので、肉を買いに行くタイミングを失ってしまったとのことであった。

その施設では、玉ねぎやジャガイモなどの野菜は、常備菜として保存しているが、肉などの生鮮食品は、衛生面など管理のルールが厳しく、その都度買いに行かなければならなかったようである。そこで働く職員に聞いたところによると、同じ法人であっても、そうしたルールが課せられているのは、小規模化された施設だけであり、その施設の大元である本園では、大きな調理室が併設されており、業者が肉などの食材を運んでくるため、調理をする段階で食材がないということはないとのことであった。

～テーブルの上にバナナ～

施設の中には、赤ちゃんを専門的に養育する「乳児院」という施設がある。これまた国の方針では、乳児院ではなく、より家庭に近い形で養育をするようにと、里親宅で生活をするようにとの方針が定められている。乳児院と里親の違いとして、

乳児院では、養育者が交代制であるが、里親は養育者が交代することなく、関わる大人が一貫していることがあげられる。ただ、そのこと以上になるほどと思ったのは、乳児院ではテーブルの上にバナナが置いたままになることはないが、里親宅ではテーブルの上にバナナが置いたままになることがあるということである。

ここではバナナを例としてあげているが、乳児院では、数人の乳児～幼児が集団で生活するため、食事の管理は一括して行われ、アレルギーや誤飲などを考えて、食材がそのまま置かれているということはない。里親宅は、あくまでも一般の家庭である。ときにはテーブルの上にバナナが置かれたままになっていることもあるかもしれない。

またバナナとは言わず、乳児院ではテーブルの上に花を活けた一輪挿しを置くようなことはないが、一般の家庭ではあるかもしれない。実際に乳児院から里親宅に移行するためにお試しでお泊りをした際に、一輪挿しをコップと勘違いしたのか、一輪挿しの水を飲もうとした子どもがいた。(里親さんが飲む前に気付いてすぐに一輪挿しは片付けられた) ずっと乳児院の生活だと、花を活けるということを知らずに育ったかもしれない。

～小規模化とか家庭的に含まれるもの～

小規模な環境をとく、家庭的な養育環境をとわれ、その理由に、養育者との愛

着形成や一貫した養育などが挙げられるが、肉のないカレーやテーブルの上のバナナに焦点が当てられることはない。小規模化したせいで、肉のないカレーになってしまったという話ではなく、小規模化していくことで、職員が肉を買いに行く余裕もない環境になる可能性があることを理解しておかなければいけないという話である。

テーブルの上にバナナや一輪挿しがある方が良いのか、良くないのかという話でもなく、「家庭的」と呼ばれる言葉には、テーブルの上のバナナや一輪挿しのように、議論している専門化が気にもしないことも含まれるとういうことである。「小規模化」や「家庭的な環境」を議論する際には、是非ともそうした視点も念頭に置いて頂きたい。

また、小規模化を推進した施設の課題として、緊急時に助けを呼べないということを知ったことがある。その小規模施設は、一軒家を借りて数人の子どもらが生活をしているが、施設の大元（本園）から物理的に離れているため、緊急時に職員を呼んだとしても本園から離れているため、到着まで時間がかかるという話であった。

大舎制であれば、すぐ隣のホームに助けを呼ぶことも出来るだろうし、事務所に誰かがいる可能性もある。小規模化を進めることで孤立感を助長させてしまうことがあるかもしれない。

国の動向は、何がなんでも小規模化、家庭的な養育を目指すという印象が強い。

施設が良いのか、里親が良いのかという論争は、頻繁に耳にするが、そうやって論争していることには、無意味さしか感じない。

小規模化や家庭的を語る際には、結論あり気の話ではなく、その場で子どもがどのような生活を送ることになるのか、その子どもに対して、周囲の大人がどのような関わり方が出来るのか、そして、そのことが子どもにどのような影響を与えることになるのかなど、子どもの生活に根付いた議論が行われなくてはならないだろう。